「相中相高百年史」より
（ 戦時体制下の相馬中学校　１）

１　はじめに

1935（昭 10）年８月、相沢中佐が永田軍務局長を暗殺するという、所謂相沢事件が起こり、軍内部の統制派と皇道派の対立激化を露呈したが、翌 36（昭 11）年の２月、皇道派青年将校によりクーデター、所謂２．２６事件が起こり、高橋蔵相、斎藤内相らが暗殺され、東京市内に戒厳令が布告される。この事件は、当時者の意図とかかわりなく、戦争への道を切りひらく結果となる。

37（昭 12）年は、７月７日の盧溝橋事件を契機に日中の本格的な戦争へ発展、その結果、日本社会全体を重々しく包んで全国的にファシズムが濃厚になり、国内の戦時体制へと進む。文教行政のにも政治介入の強化によって、「戦時下教育」の時代に入るのである。

38（昭 13）年、日中戦争は拡大し、政府は「国家総動員法」を公布して思想統制の強化など挙国一致体制を固めてゆく。日中戦争は膠着状態に入り、39（昭 14）年５月、ノモンハンで日ソ両軍が衝突し、関東軍は大打撃を受ける。９月にドイツ軍はポーランドに侵攻し、英仏はドイツに宣戦を布告し、ここに第二次世界大戦の火蓋が切って落とされる。

翌 40（昭 15）年は紀元 2600 年にあたり、奉祝の式典が盛大に執り行われ、神国意識の昂揚をねらう。そして 41（昭 16）年 12 月、東条内閣によって宣戦を布告し「太平洋戦争」に突入。この時点より急速に「戦時教育体制」をとり、43（昭 18）年には「決戦体制」に入り、戦争の激しさが本土に迫り「戦時教育令」公布に伴い、学校教育の停止。そして 45（昭 20）年８月 14 日、ポツダム宣言を受託し、翌 15 日には「終戦」の詔書が出、忌まわしい戦争に終止符を打つのである。

ただ、ひたすら戦争遂行のために、エネルギーの全てが結集された時代であり、本校もその例外ではあり得なかった。昭和十年代の本校の歴史を概観していこうと思う。

昭和十年代の、戦争期の教育の動向、改革の方策は「教育審議会」（昭和 12 年 12 月～16 年 10 月）によって決定されたと言っても過言ではないだろう。……

その中の基本精神は、「皇国の道」を基として、よく国家有為の人材育成する方法をたてるところにあり、国民としての負荷の大任を果たし得る者の錬成を主眼目としている。

……

教育方針はこの年代を通して国策に添った「国体の本義に徹した皇国民」の錬成にあった。…

> 訓育ハ「教育ニ関スル勅語」ノ御趣旨ニ基キ国民道徳ノ涵養ニ意ヲ用ヒ国体観念ヲ明徴ナラシムト常ニ生徒ヲシテ実践躬行ニ導キ且ツ社会生活ニ馴レシメ真ニ忘私奉公ノ精神ヲ養成セントス
>
> （「相中沿革史」）

この目標を具現する方策として、「実践鍛錬と団体規律訓練」を主軸に、武道奨励、配属将校による軍事教育の強化、各種の勤労作業などを重視している。

（２月４日　選択転記　村山）